

●優秀賞

「違っていて 当然だよね 先生」

～積極的に異文化に関わろうとする、
児童の育成を目指して～

愛知県名古屋市立東白壁小学校 よしむらめぐみ 吉村恵美



I ♪世界中 だれだって♪

4月の初めの音楽の時間。3年生の担任となり、「小さな世界」という歌を指導した。教科書には世界各国の子どもたちの写真が掲載されているのだが、教科書を開くと同時に、児童が写真を見て大きな声で笑い始めた。そこにはアフリカの子ども写真が載っていた。児童はその写真を見て、「肌が黒い」「変な飾りをつけてる」などと言い、大声で笑い出したのだ。

本学級には、韓国人の母親をもつ児童とフィリピン人の児童がいる。しかし学級の児童はこの二人を特別視することなく、仲良く過ごしてきた。国籍や外見の違いなど気にすることなく、一人の友達として接する児童の姿を見て、私は



教科書に掲載されている写真

とても感心していた。だからこそ、こうした児童の反応には大変驚いた。児童には、外国の人に対する特別な意識はないと思っていたからだ。そしてこのとき、「世界中には肌の色や言語、生活習慣など、私たち日本人とは全く異なることが多くあり、私たちが当たり前だと思っていることでも、外国の人からすると、驚くようなことはたくさんある」ということを児童に話した。

話を聞く児童の目は輝き、じっと私を見つめている。そのときの様子は今でも強く心に残っている。初めて聞く外国の様子に教室は静まり返り、夢中になって話を聞いていた。

しばらくすると、一人の児童が「校舎がなく、外で勉強している国があるの？」と質問した。するとそれを機に、他の児童からも次々に感想や質問があふれ出た。「ご飯を食べるときに、お茶碗を持たないの？ 日本と違うね」「どうして豚肉を食べないの？」など、児童の表情は真剣そのものだった。

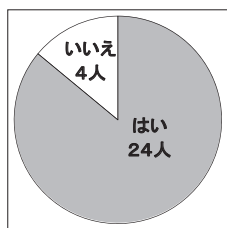
そんな児童を見て私は強く思った。何事にも興味をもって聞き、素直に感じるができるこの児童だからこそ、異文化を受け入れることができる児童に育ってほしいと。

Ⅱ 児童の実態

初めに、児童がどの程度外国の言葉や文化を知っているのか、調査を行った。

対象児童 東白壁小学校3年白組 28名

【Q1】 外国の言葉で知っている言葉はありますか。



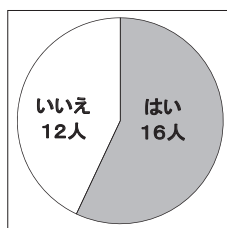
★児童が書いた言葉の一例

「ハロー」「ブルー」「アップル」
「アニョハセヨ」「シェイシェイ」
「ボンジュール」

Q1で「はい」と答えた児童24名のうち、英語の言葉を書いた児童が19名、その他の言葉を書いた児童は5名いた。

この調査から、英語については、挨拶以外の言葉もいくつかは知っていることと、英語以外の言葉はあまり知らないということが分かった。

【Q2】 外国の文化や生活のことで、知っていることはありますか。



- ◎ ご飯を手で食べる国がある。
- ◎ イタリア人はピザが好き。
- ◎ 幼虫を食べる国がある。
- ◎ 食べ物がない国がある。
- ◎ 1年中暑い国がある。
- ◎ 靴を履かないで、裸足で過ごす国がある。
- ◎ 服を着ないで、葉っぱを付けている国がある。

Q2から、半数近くの児童が、外国の文化や生活の様子を知らないということが分かった。また「はい」と答えた児童が「知っていること」として答えのうち、主なものが上のおりである。

この調査から、食に関することや、ごく限られた地域での特別な様子などを知っている児童がいるということが分かった。

Ⅲ 実践の様子

1 1学期の実践

実践1：国名や場所を知ろう

「知っている国名を書いてみよう」と児童に投げかけた。すると多くの児童が10か国以上の国名を書き、中には40か国もの国名を書いた児童もいた。しかし、その国がどこにあるのかを知る児童は少なかった。そこで、世界地図を使って国当てゲームを行うことにした。すると多くの児童が、誰よりも早く見つけようと食い入るように地図を見つめ、ゲームを通して「イギリスって遠いんだね」「あれ？ アメリカが二つもあるよ！」など、いろいろなことに気付いていった。

児童は「早く地図の勉強をしようよ」「地図を見てるのが楽しい」と言うようになり、休み時間に国当てゲームをしたり、家に地図を持ち帰り、国の場所を覚えたりするようになった。

【児童の様子】

「国当てゲーム」を通して、いろいろな国の名前や場所をたくさん知ることができた。世界には知らない国がたくさんあるということに気付く、「どんな生活をしている国なんだろう」と、世界の国々の様子について興味をもつことができた。



国当てゲームで国を探す児童の様子

実践2：どんな人がどんな生活をしているのかを知ろう

(1) 国の様子について

「国当てゲーム」を通して、世界にはたくさんの国があることを知った児童。しかし「アフリカって国はないんだね」「名前は知っててもどんな国なのか知らないな」との声があがった。そこで、今度はそれぞれの国の様子を知るため、街並みや民族衣装、その国の小学生の様子などの画像を集めて紹介した。画像が変わるたびに「ベトナムの民族衣装は見たことあるよ」「アフリカみたいに自然がいっぱいの国にもビルが建ってるんだ！」などと感想や驚きの声が聞かれ、熱心に画像を見ていた。

【児童の様子】

実践前の児童は「外国と言えばアメリカとヨーロッパだね」「それ以外の国は遅れてるんでしょ」などと話していた。しかし、実際に目で見て学習したことで、児童はそれぞれの国の現状を知ることができた。

また、街並みや衣装などから気候との関連を考え、日本とは違って、四季の変化がない国の様子についても考えることができた。

国の様子についての学習を終えると、「もう終わり？」「もっと知りたい！」とたくさんの声が聞かれた。そこで次は、児童にとって興味深い世界の食事について知る学習を行うことにした。

(2) 世界の食事について

「どの国に行ってみたい？」と児童に尋ね、それらの国の食事を画像にまとめた。児童は画像が変わるたびに「これ知ってる」「おいしそう」などと話していた。中には児童が食べたことのあるものもあり、「これはキムチ入りの海苔巻って感じでおいしいよ」と味を伝えるなど、深まりのある学習になっていった。

【児童の様子】

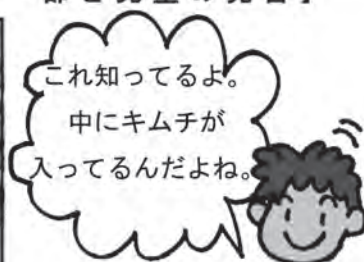
児童は、国によってさまざまな違いがあり、その違いがおかしいものではないということに

【紹介した画像の一部と児童の発言】



【エチオピアの小学生】

【紹介した画像の一部と児童の発言】



【韓国の料理】



【フィリピンの料理】

気付くことができた。また「中国で虫を食べるってテレビで見たけど違う食事もあるんだね」というように、自分が思い違いをしていたことに気付くことができた児童もいた。

2 1学期の実践を振り返って

初めに国当てゲームをした時は、単にゲームとして楽しんでいるようだった。しかし、外国についての学習が進むにつれ、児童の反応に変化が表れ始めた。

【成果】

児童の感想から、現状を知り、互いのよさに気付いたり、日本と比較して外国の様子をとらえたり、世界の国々の現状に対して、自分の思いをもったりすることができるようになってきたことが分かる。

実践を通して、児童の興味が表面的なものにとどまらず、深まってきていると感ずることができた。「もっと知りたい!」という児童の思いを次の学習につなげていくことが、児童の興味を持続させ、自ら進んで学習する態度を育てることにつながると考える。

1学期の実践で、世界の国の様子を学習し、日本とは異なることがたくさんあることを学習した。その結果、それぞれの国の違いを目にしても、「変わっている」と言う児童はいなくなった。これはうれしい変化である。児童は、自

☆ 1学期の実践を終えて 児童の感想 ☆

- ◎ 日本と同じような高いビルがある国があった。
- ◎ 日本のようなきれいな家もあれば、戦争をして壊れてしまっている家もあって、平和な国と貧しい国があるんだと思った。
- ◎ 暖かい国の人は、薄着だったり、裸足だったりしていた。
- ◎ お米は日本のものだと思っていたけど、外国でも食べられていると知り驚いた。外国の料理を食べてみたいと思った。
- ◎ 国や地域によって、食べるものが全然違うんだと思った。
- ◎ 他の国の小学生は、どんな遊びをしているのか知りたいと思った。

分たちとは異なる文化の存在を知り、その違いを受け入れたり、違いに興味をもったりすることができるようになってきた。

【課題】

1学期は、教師側から情報を提示することが多くなってしまった。児童は外国に興味をもち、もっと知りたいという思いを抱いている。こうした思いを受け止め、2学期は体験的な学習の機会を多くもつようにしていきたい。そうすることで、児童が受け身ではなく自発的な活動へと学習を広げ、児童の意欲を高めていきたいと考えていた。

3 新たな課題

2学期の初め、韓国人の母親をもつ児童（A児）とフィリピン人の児童（B児）の二人と話していたときのことだ。

予期せぬ返事に言葉を失った。二つの言語を話し、食事や文化など私たちの倍のことを知っている。私は二人をうらやましいと思っていた。

しかし、当の本人たちは「外国人」と周りから言われるのではないかと、不安を抱いて過ごしていたのだ。そんな思いをもっていることなど、想像もしなかった。不安な気持ちに全く気付いてあげられなかったことを情けなく思うと同時に、二人には、もっと自信をもって自分の国のことを話せるようになってほしいと強く感じた。

4 2学期の実践

実践3：「韓国について知ろう」
～韓国ウィークの実施～

【実践の様子】

二人には、スペシャル先生として、自分の国について紹介してもらうことにした。全体の場で活躍し、周りから認められることで、自分の境遇をプラスにとらえることができると考えたからだ。

A児は、優しく穏やかな性格である。普段から目立つことはあまり好まず、そのため、全体



T：総合の時間に外国の勉強をしているけど、どう思う？

A児：みんなに韓国のことを知ってもらえるからうれしいよ。

B児：私も！ もっとフィリピンのことをみんなに知ってもらいたい。

T：二人はこうして、日本の学校に通って生活しているから、日本人から見ると外国人と見られるだろうけど、外国人でよかったと思うときって、どんなとき？

A、B児：え～?! よかったことなんて、一度もないよ。嫌なことのほうが多いよね～!!



の場で一人での発表となると、とたんに声が小さくなり、消極的になってしまう。

「韓国について知っていることを、みんなの前で話してほしいんだけど」とA児に伝えたとときも、「みんなの前で？ 一人で…？」と、やはり不安そうだった。

A児は、初めは前に出て発表することを嫌がっていたが、周りの児童から「いいことなんだから、前で話してよ」と促され、照れながらみんなの前に立った。次々と質問があがったが、A児はきちんと答え、韓国語の歌を3曲も歌った。この日、A児に対する大きな拍手は、何度も沸き起こった。

【ジャエモゴンミダ 給食の時間】

発表の日の給食の時間。挨拶をしようとA児が前に立つと、どこからともなく「韓国語で『いただきます』をしようよ！」との声が。そしてA児がうれしそうに「ジャエモゴンミダ」と言うと、いつも以上に元気に「ジャエモゴンミダ！」と他の児童も挨拶をした。もちろん、『ごちそうさま』の挨拶も韓国語で言うことになった。「今週は韓国ウィークだね！」そう言って、みんなで楽しんでいた。

すると、「先生、ほかの挨拶も韓国語でしたい！」と児童の声が聞かれた。そこでよく使う言葉をA児にカタカナで書いてもらい、教室に掲示することにした。

児童の力はすごい！ あっという間に使い始め、「〇〇ちゃん ゴマスミダ(ありがとう)」「ソンセンニン ノンジャ！（先生遊ぼう）」と一気に日本語や韓国語が飛び交う教室となった。

【テ ムン ノリ 音楽の時間】

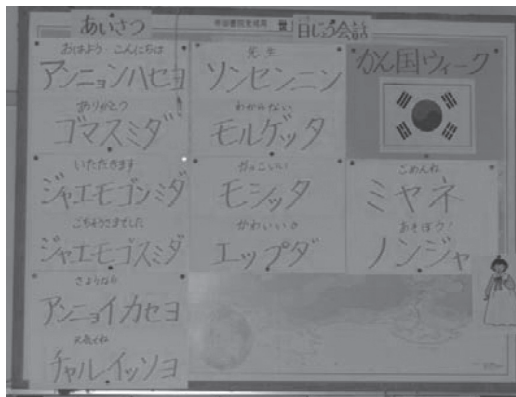
次の日の音楽の時間。A児が以前から楽しみにしていた時間だ。なぜなら、教科書には世界の歌がいくつか載っていて、その中に韓国の歌も載っていたのである。A児は、早くその歌をみんなで歌いたかったのだ。

初めにA児が「テ ムン ノリ」を韓国語で歌い、歌詞の意味を説明した。言葉は難しいが、他の児童にはかわいらしい発音に聞こえたよう

で、A児に合わせてみんなで歌っていた。さらに、「歌に合わせてみんなで遊ぶことができるんだよ」とA児が伝えると、「みんなでやろうよ！」と大盛り上がり。「ロンドン橋の遊びと似てるね」「捕まったら門番とじゃんけんをするんだよ」そう言って、歌いながら楽しんだ。「もう一回やろうよ」という言葉が止むことなく、チャイムが鳴ったのも忘れて、いつまでも



A児の発表の様子



韓国語の教室掲示



韓国の遊びを体験する様子

みんなで楽しんでいた。

【児童の様子】

初めは不安そうだったA児が、今ではとてもうれしそうで、自信にあふれている。全体の場合、あれ程堂々と話をしたり歌ったりする姿は、正直想像していなかった。

金曜日の韓国ウィークの最終日。「もう終わっちゃうの？ もっとやりたかったな」と寂しそ

うなA児。一方B児は「もちろんフィリピンウィークもあるよね？」とやる気満々だ。

A児は韓国の文化を認めてもらえたという充実感、B児はフィリピンについても韓国と同じように受け入れてもらえそうだという安心感、他の児童は異文化にふれることができたという満足感を味わうことができた。

★発表の主な様子★

① 小学校の様子について

A児：韓国では、小学校1年生から英語の授業があります。

児童：え～？ 日本と違うね。他の教科はだいたい同じだね。

A児：あと、土曜日は隔週で学校があります。身だしなみのチェックは、とても厳しいです。

② 小学生の遊びについて

A児：韓国の小学生は、真実ゲーム、マルトウッパッキ、なぞなぞ、しりとりなどをして遊んでいます。

児童：うわ～！ 日本と同じ遊びがある。マルトウッパッキなんて、どんな遊びか想像がつかないね。遊んでみたいな。

③ 小さな子が歌う歌について

A児：小さな子どもがよく歌う歌は、くま3ひき、ちょうちょう、私の妹、にぎってひらいてなどがあります。

児童：何か歌ってください。（パチパチパチ…）

A児：じゃあ、はずかしいので、みんなはこっちを見ないでくださいね。

児童：（パチパチパチ…）今の歌は、どういう意味ですか？

④ 日本とは違う文化について

A児：韓国では小さい時を大切に考え、1才の誕生日をきちんとお祝いします。日本の「ひなまつり」や「こどもの日」のように、男の子と女の子を分けてお祝いすることはありません。

児童：じゃあ、おひなさまを飾らないんだね。日本だけなのかな。

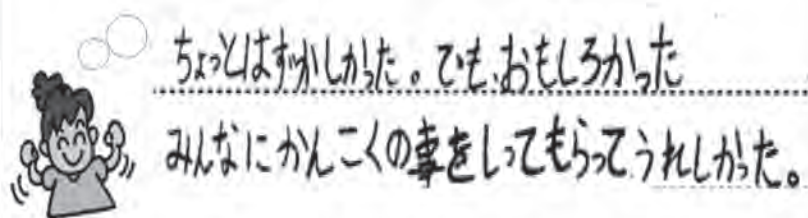


【A児が準備した写真の1枚】

韓国ウィークで行った主な活動

- ◎ A児によるプレゼンテーション
- ◎ 韓国語での朝・給食時・帰りの挨拶
- ◎ 歌や遊びの体験
- ◎ 帰りの会で、A児による韓国語ミニミニ講座

★韓国ウィークを終えて A児の感想★



★「韓国ウィーク」を終えて 児童の感想★

- ◎ 韓国語の挨拶や会話が覚えられたのでよかった。もっと覚えたい。
- ◎ 韓国の文化がよく分かって楽しかった。
- ◎ テ ムン ノリ（遊び歌）の韓国語と日本語の両方でできて楽しかった。
- ◎ 韓国はいろいろな行事があるし、民族衣装もすごいなと思った。（B児）

実践4：「フィリピンについて知ろう」 ～フィリピンウィークの実施～

【実践の様子】

B児は活発で、全体の場での発言も堂々としている。前回の韓国ウィークの時からフィリピンウィークを待ち望んでいた。B児は保護者と相談しながら、自分でできることをしようと、こつこつと準備を進めていた。

フィリピンウィーク初日。B児は堂々と発表した。他の児童は、日本に加え、先日学習した韓国の様子と、フィリピンの様子の三つを比較しながら話を聞くことができた。特に言語や宗教に関しては、日本や韓国と大きく異なるため、話を聞く他の児童は、B児の話にとても驚いていた。

B児は、みんなが興味をもって真剣に話を聞く姿を見て、緊張がほぐれていった様子だった。

発表の中でB児が紹介した写真の中に、B児が着物を着た写真と民族衣装を着た写真があった。それを見た他の児童からは、「Bちゃん、いいな～！ どっちも着られるなんて」と声があがった。これはまさしく、彼女の特権である。「いいでしょう！」と自慢げに答えるB児の目は、キラキラと光っていた。



自分の名前を説明する様子

【♪レロン レロン シンタ♪ 音楽の時間】

B児も音楽の時間を楽しみにしていた。なぜなら、音楽の教科書には韓国の歌とともに、フィリピンの歌も載っていたからだ。

しかし、韓国の歌とは違って、今回は日本語の歌詞しか載っていない。しかしB児は、あらかじめフィリピン語に訳したものを準備し、分

からない単語は自分で調べてきていた。B児がここまで熱心に準備をしているとは思ってもせず、B児のフィリピンに対する熱い思いと、伝えたいという強い願いを改めて知ることとなった。

【バイ 帰りの会の時間】

ミニミニフィリピン語講座の時のこと。B児だけでなく、他の児童も楽しみにしている一日

★発表の主な様子★

① 小学校の様子について

B児：フィリピンでは、フィリピン語と英語の授業があります。ほかにも神様のことについて勉強する時間があります。私のお母さんは、寝るときにいつもお祈りをするし、フィリピンでは毎週教会に行ってお祈りをします。

児童：え～?! 神様の授業って、どういうことですか？

韓国と同じで、フィリピンでも英語を勉強しているんだね。

② 小学生の遊びについて

B児：フィリピンの小学生は、ぬり絵やかくれんぼなどをして遊んでいます。

児童：遊びは日本と同じだね。

③ 日本とは違う文化について

B児：1月1日に花火があがります。

児童：それは打ち上げ花火ですか。それとも手で持つ花火ですか。

B児：打ち上げ花火もあるし、家で花火をしたりもします。次の日は、けむりのにおいで町中が臭いくらいです。

児童：日本では除夜の鐘が鳴るよね。

B児：これはフィリピンの民族衣装です。フィリピン人のお祭りでは、このような衣装を着て、歌ったり食べたりします。

児童：かわいい～！

B児：それからフィリピンでは、おやつの時間があって、お昼ご飯は食べません。学校にはおやつをもっていきます。

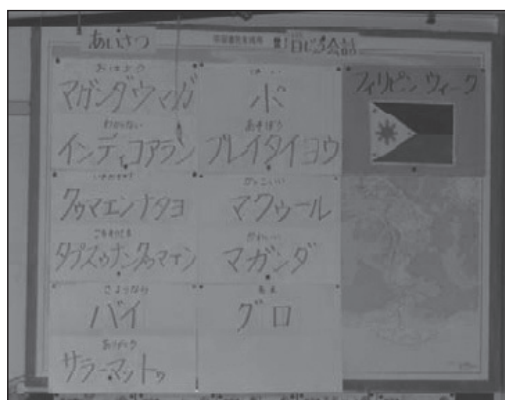
児童：え～?! いいな！



【民族衣装を着た
B児の写真】



フィリピン語で歌うB児



フィリピン語の教室掲示

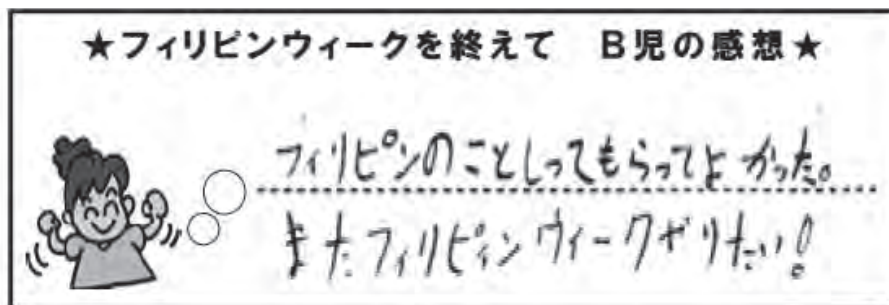
の終わりの時間だ。B児に続いてみんなで発音するのだが、B児の発音とはどこか違う。

韓国ウィークの時と同じように、今回は覚えただけのフィリピン語が教室内を飛び交っていた。しかし、韓国語の時のように、なかなかすぐには覚えることができない。「Bちゃんが言うと、本当に外国語っぽいよね」「フィリピン語は小さい“イ”とか“ツ”とかがあって難しいな」「フィリピン語が話せるBちゃんはすごいね!」そんな言葉が聞かれた。日本語とフィ

リピン語の音の違いを感じ取り、両方を話すB児に、他の児童は改めて感心していたようだった。

【児童の様子】

自分が外国人であることに対して、特に強い不安を抱えていたB児。しかし2学期の実践を通して、他の児童が韓国やフィリピンについての理解を深め、認めてくれたことを実感し、外国人として日本で生活していることのよさを自信に変えることができた。



★「フィリピンウィーク」を終えて 児童の感想★

- ◎ フィリピン語は韓国語よりもさらに言いにくかった。小さい「ウ」が入って難しかったけど、慣れたら簡単だった。
- ◎ 国にはそれぞれの言葉があって、韓国語やフィリピン語は発音がおもしろくてよかった。
- ◎ フィリピンの歌を覚えることができた。暖かい国っぽくて、のんびりとしたところがよかった。
- ◎ 楽しかったし、びっくりしたこともあった。勉強になったから、またやってみたい。(A児)

「AちゃんとBちゃんのおかげで、私たちは韓国とフィリピンのことを勉強できるから、ラッキーだね」とある児童が言い、他の児童も大きくうなずいた。こうした発言は、A児とB児に大きな自信を与えたであろう。

児童は、世界にはたくさんの国があり、違いがあることは当然であるということ、その違いの背景には、気候や宗教や言語など、いろいろなことが関係しているということを、体験を通して学習することができた。

フィリピンウィークが終わるころ、B児が英語の勉強をしたいと話した。英語もフィリピンの大切な言語であるからだ。すると驚いたことに、ほとんどの児童が「やりたい！ やりたい！」と大賛成。それ以来、帰りの会にミニミニ英語講座が設けられ、今では元気いっぱいに歌やチャンツに取り組んでいる。

5 2学期の実践を振り返って

韓国ウィークとフィリピンウィークを終えた後、A児とB児に話を聞いてみた。

以前話していたような二人の不安が、今回の実践で消えた訳ではない。しかし、うれしい変化はあった。周りの児童は韓国に興味をもち、A児に質問するようになった。A児も、これまでは韓国について聞かれれば答えるといった様子だったが、今では積極的に韓国のことを紹介するようになった。B児は「ラッコはフィリピン語で『トイレ』って言うんだよ」と、ミニミ

ニ英語講座の時間にフィリピン語を次々と紹介するようになった。こうした変化は、外国人であるということに対する二人の不安が和らいだからであると考える。

二人はこの先も「外国人」と周りの人から言われ、嫌な思いをすることがあるかもしれない。しかし自分に自信をもっていれば、不快感や不安感を感じることはなくなるであろう。今後も、二人がもつ特性を生かしていける場を設けていきたい。それがA児とB児のためだけでなく、学級の児童が外国の文化を理解し、外国の人の心を理解する大切な学習の場になるに違いないと考えるからだ。

実践を通して、ずっと気になっていたことがあった。それは、1学期の初めに、アフリカの人の写真を見て、クラスのみんなが大笑いしたことだ。外国のことを学習してきた今、児童がどう考えているのかを知りたかった。

そこで、準備しておいたアフリカの人の写真を何枚か見せ、もう一度音楽の教科書を開き、みんなで写真を見た。笑い声は聞こえてこない。「児童はどう感じているのだろうか…」不安な気持ちを抑え、写真を見た感想を児童に聞いてみた。

下の資料は、1学期に大きな声で笑っていた児童の言葉である。

異文化を知り、外見や習慣の違いを笑ったり馬鹿にしたりすることなく、それぞれのよさとしてとらえることができるようになってきたこ



T：二人は外国人と見られるかもしれないけど、だからこそスペシャル先生として、みんなに伝えることがあったと思うんだけど。

A児：うん。みんなが韓国のことを聞いてくれて、うれしかった。

T：前は「外国人」と言われるのが心配と言ってたけど、韓国人やフィリピン人であることにもっと自信をもていいんじゃないかな。

B児：うん。フィリピンウィークの時に、みんなが「すごい」って言ってくれたから、うれしかった。



とが分かる。児童の言葉にほっとし、うれしく思った。

ある日、外国の人の名前について話題になった。聞き慣れない名前に、一人の児童が「どう
いうこと？ その名前」と尋ねた。すると、「違っ
ていて当然だよね、先生！」と言う声が聞こえ

た。それは、1学期の初めに「肌が黒い」と大
笑いしていた児童の声だった。こうした言葉が
自然と児童の口から出てきたことをとてもうれ
しく思い、児童の意識の変化を感じることがで
きた。

